

温かな人間関係を育むための援助の工夫

～ 思いを伝え合う生活を通して～

那覇市立上間幼稚園 栄野川公恵

テーマ設定理由

幼稚園教育要領領域「人間関係」の〔内容の取り扱い〕において、「教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確認していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。」と示されている。

近年、核家族化、少子化、養育・教育に対する不安や悩みにより子どもを取り巻く社会環境は大きく変化し、子どもの成長発達に影響をおよぼしている。特に、人間関係の希薄化は社会問題にもなっており、人と関わったり相手を受け入れたりする力は弱体化している状況にある。よって、園生活において人と人をつなぐ温かな関係を育むことは重要である。安定感から生まれる信頼関係は自己を確認させ思いやりが育つと考える。

以前の保育実践で、友達と一緒に遊びたいという子どもの思いをうけ、「いれて」「どうぞ」の遊びの場面設定をした紙芝居を作り実践を行った。しかし、幼児の生活は、約束をすればよくなるというものではなかった。「いれて」と言われたら「どうぞ」といわなければならない約束は、仲間にいれないと先生に叱られてしまうと困惑する原因になった。

教師は、子どもの遊びをよく見つめ、一人一人の内面を理解し常に幼児の側に立ち心に寄り添っていくことが大切だと考える。どんな場合においても子どもの気持ちを見極めることで、教師のこぼかけが変わってくる。温かな関係をつくる上の援助として、教師の言葉かけは大変重要である。また、絵本や音楽等感性を磨く教材とどう出合わせるか、教師の意図する教育と一人一人の実態に合った保育・教育が求められている。温かな援助を通し自分の思っていることを相手に伝えることができるように、又、徐々に相手の思っていることやいいたいことに気付いていくことができるようにすることが重要である。

そこで、「思いを伝え合う」を軸に「温かな人間関係を育むための援助のあり方」をめざし本テーマを設定した。

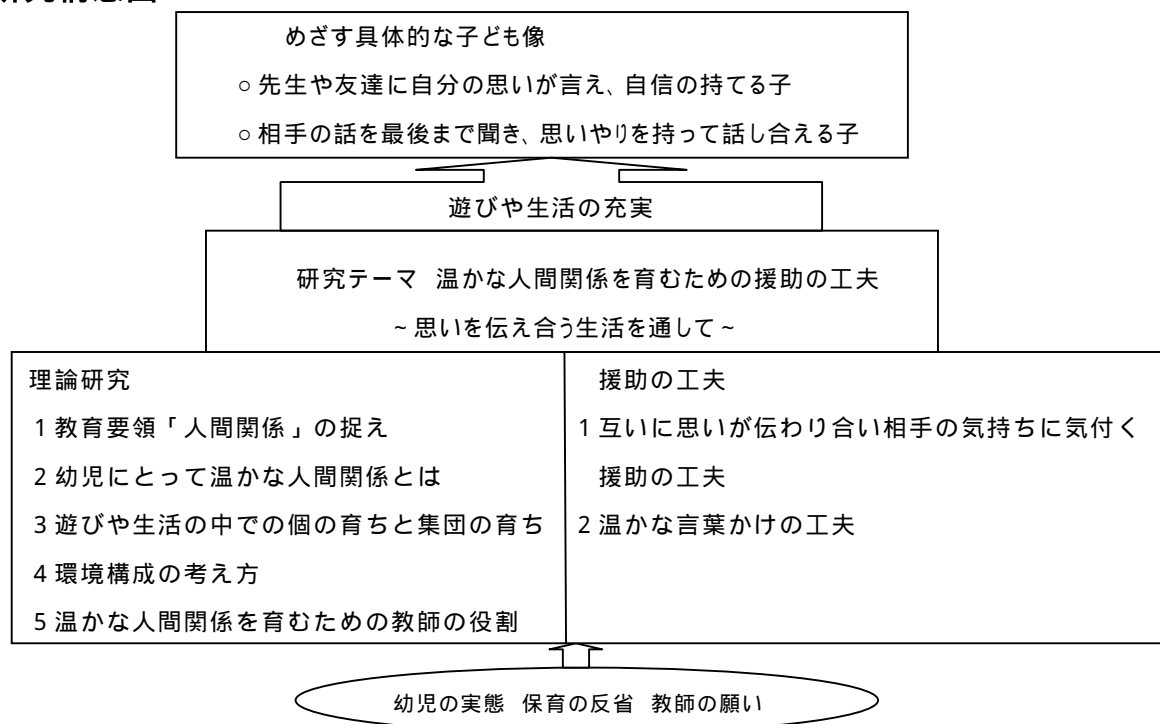
研究目標

温かな人間関係を育むことで子どもが自分の思いを伝えあえるように育ちを保証していく。

研究方針

- 1 幼児の発達の方向を見通し、温かな人間関係を育む為の幼児理解を深める。
- 2 幼児一人一人の心の動きに対応しながら思いを伝え合う関係を考える。

研究構想図



研究内容

1 教育要領・領域「人間関係」の捉え

「幼稚園教育要領解説」では人との関わりの発達の過程について、人とのかかわる力の基礎は、自分は親や周囲の人に温かく見守られているという安定感から生まれる。人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立することによって培われる、とある。幼稚園生活においては、なによりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感を味わうようにすることが大切である。また、幼児は、幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自己の存在感や自分とは違った様々な人への積極的な関心、共感や思いやりをもつようになる。また、生活の中で自分の感情や意志を表現しつつ、他の人々と共に生活する楽しさや大切さを知り、そうした生活のために必要な習慣や態度を身に付けていくことが、人と関わる力を育てることになる。

学級の集団にあって、一人一人の子どもをみとめることは、なによりも大切である。生活の様々な出来事や遊びの中で、子どもから発せられているものを受け止めるときは、私とあなたというように原点は対一である。教師は一人一人に目を向け、その思いを受け止めて、理解しようとする姿勢をとることが大切である。幼児一人一人の思いが「かけがえのない存在」として受け止められたことで、自分自身を発揮し仲間とかかわるようになる。また、幼児が集団の中で、生き生きとしていられることができるのは、集団の仲間達に温かく見守られ、自分らしくいられる時である。友達と一緒に遊ぶ楽しさ、嬉しさなどのかかわり合いを経験することで、お互いの思いや存在を認めあうことができる。衝突やトラブルもあるが、そのことは、他者にも要求があること、他者が自分とは違ったイメージや思いを持っていることに気付いていくということ、とても大切な経験である。幼児同士の心と心が結びついた集団は温かな集団となり、幼児同士が育ち合うと考える。

以上のことから、「人間関係」の捉えとして大切なことは、生活において、ありのままの自分がだせる温かい関係でむすばれることであると捉える。

2 幼児にとって温かな人間関係とは

幼児が、遊びや生活の中で協力や相談したりすることや遊びの楽しさを共感し充実感を味わうことは、人とのかかわる力を育てる上で大切である。喜びや悲しみを共感しあうことで友達と積極的にかかわるようになり感動をお互いに共有していく経験を積み重ねていく。このように、幼児期にふさわしい経験をすることによって、温かな人間関係を展開していくことが成り立つと捉え、幼児期に必要な経験を次のようにまとめた。

- (1) 幼児自身が周りの人にうけいれられ、認められる経験
 - ・基本的な信頼関係が成り立つ。
 - ・幼児が自己発揮できるようになる。
- (2) 他者との交流・協力をする体験
 - ・自分以外の人の存在を知る。
 - ・自己コントロールをしながら折り合いをつけていく力が育つ。
- (3) 集団のルールやきまりに繰り返し触れる経験
 - ・よりよく生活するための社会のルールがあることに気付き守る。

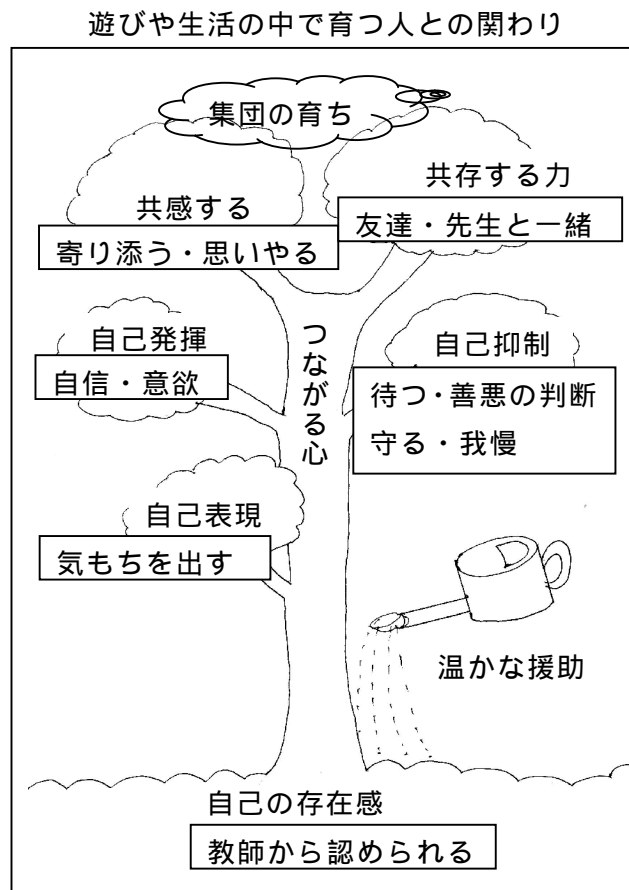
このような経験を通して温かな人間関係が育つと考える。

3 遊びや生活の中での個の育ちと集団の育ち

人との関わりは、最初からスムーズに行えるものではなく、幼稚園から終了までの間にトラブルや葛藤、たのしい経験など様々な体験を通して、少しずつ子どもの中に育ってくる。遊びや生活の中で育つ人とののかわりと一人一人が育ち集団も育っていく過程を次の表のようにまとめた。

園の生活の中で、人との関わりをみていくと、教師との温かな信頼関係の中で自己の存在感が生まれる。そして、教師から認められることで自分の存在を感じることができるようになる。温かく受容された中で、幼児は安定し、自己表現をするようになる。その中で幼児は、みずから環境に働きかけるようになり、友達との関わりの中で、喜びや悲しみ、葛藤などの様々な感情体験を生活の中に取り入れ、自己発揮や自己抑制をしていく。又、生活や遊びの中でどう人と関わっていくかを学んでいく。友達との関わりを深めることで、他者への思いやりの行動が現れ、気持ちを共感できるようになる。やがては、園での集団生活を展開し楽しく暮らして行くために、ルールやきまりの必要性に気付き自分達で生活を営んでいく共存する力が生まれてくる。

教師は子どもの遊びや生活の中で常に子どもの発達を捉えながら子どもの育ちに必要な経験へとつながっていけるよう援助することが重要である。



4 環境構成の考え方

幼稚園教育の目標が有効に達成される為には、幼児が自発的・主体的にかかわるような環境の構成が最も大切である。その環境には、人的・物的の両要素が含まれている。幼稚園の環境は、子どもの動きに添って変化させていくことが大切であり、子どもの興味関心に従って、環境の再構成や見直しの工夫が必要である。保育室に置く材料や用具の位置、数量など、その日のねらいや昨日の子どもの姿を捉えながら予想することが大切である。さらに、子どもの活動が停滞しないように子どもの心を動かすような教材・環境を創りだすことが求められている。子どもが思いを伝えられるような、思いやりが持てるような保育を行うにあたり、どのような教材教具が必要か意味づけをし、環境をセッティングすることが大切である。その時に教師自身が、楽しい雰囲気をかもしながら、子どもに意欲を持たせることも環境構成の大切な要素である。子どもを主体として環境を創りだしていくことは、絶えず子どもと共に環境をつくりだすことで、生活感があり、温かさや喜びがあふれていると考える。

5 温かな人間関係を育む為の教師の役割

幼稚園は、遊びを中心とする生活の中で幼児が主体性を発揮しながら発達に必要な力を自ら獲得する場である。そのためには、一人一人の幼児の行う様々な行動に対して援助を行う教師の役割が大切である。教師の役割として必要な要点を6つにまとめた。

(1) 幼児理解・総合的に指導する力

幼児は、自発的な活動である遊びを通して、心身全体を働かせ、さまざまなことを経験しつつ、理解力・言語表現能力・運動能力・思考力・社会性・道徳性などの多様な能力や性質について、相互に関連させながら総合的な発達を遂げる。このような幼児の発達段階をその内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感を持って受け入れる幼児理解が、基本として重要である。

(2) 具体的に保育を構想する力・実践力

幼児理解に基づき一人一人の発達段階と個別に応じて計画的に多様な保育を構想し実践する力

(3) 得意分野の育成、教員集団の一員としての協同性

個性あふれる教職員同士が、コミュニケーションを図りつつ、教員集団の一員として協働関係を構築して、園全体として教育活動を展開していくことが求められる。複数の担任が、持ち味をいかしながら、幼児一人一人に対してより柔軟に対応することに意義がある。

(4) 人権に対する理解

幼児が集団生活を初めて経験する場としての幼稚園において、幼児が互いに尊重し社会の基本的ルールが存在に気付き、それに従った行動ができるような素地を身につけるように指導する力が求められる。

(5) 保護者及び地域社会との関係を構築する力

幼稚園は、地域の幼児教育のセンターとしての機能や未収園児のセンターとしての機能を発揮し、未収園児の親子登園、子育て相談、園解放、子育て情報の提供など子育て支援活動を展開することが求められている。

(6) 温かな人間関係を育むための援助と言葉かけ

教師は、子どもの遊びや生活の活動を支える援助者である。こどもの育ちを支えるための教師の役割として、具体的な援助のあり方と温かな言葉かけを次のような表にまとめた。

温かな言葉かけ	具体的な援助のあり方	援助
「そう思うのね。」「先生と遊ぼうね。」 「先生と一緒にいるよ。」	幼児の思いに寄り添い受け止める。	受容
「安心して。」「先生が見ているよ。」 「ありがとう。助かったよ。」	幼児が安心して自分をだせるような関わり方をする。	安心感
「そうなのね。」	幼児の思いを組みとり、応答しながら言葉をかける。	応答
「こうしなかったのかな。」 「やりたかったのね。でもね。」	自分の思いをうまく表現できなかつたり、気持ち素直にせず、隠してしまつたり、屈折した表現がある場合は相手の気持ちに共感しながら思いをくみ取れるようにしていく。	傾聴
「よく順番守れたね。」 「待っていてくれてありがとう。」	ほめながらその中で知って欲しいこと、身につけさせたいことを言葉かけしていく。	ルールの共有
「あら、こうなったのね。」 「それ、いいと思うよ。」	幼児の思いや考える力を大切に、幼児の願いに添って必要な時必要なだけ関わっていく。	認める
「残念だったのね。」 「いやだったのね。」 「泣きたかったのね。」	幼児が挫折、葛藤、不安が見られる時は、幼児が何を思い悩んでいるか理解しながら気持ちを受け止め、一緒に考える。	協働
「すごいね。」「嬉しかったのね。」 「先生に話しをしてくれて、ありがとう。」「楽しかったのね。」	幼児の発見、喜び、嬉しさなどを受け止め共感しそのことが深まるような関わりをもつ。	共感
「大好きな〇君、その言い方は悲しいな。」「この言葉は、嫌いだな。（「バカ」などに対して）」「みんながやっても、いけないことあるよね。」 「ただだけでは、わからないよね。」	危険を伴うことや最低限のルールは、幼児と向き合い毅然とした態度で伝える。	善悪の判断
「あなたもいやだったのね。」「そんなふうに言われたら悲しくなるね。」「よく話をきいてみた。」「ごめんねって言えてよかったね。」「どうしてずるいって呼ばれたのかな。」	幼児が自分達で考え、友達とトラブルを解決し合おうとする心情、態度が育むような援助をする。	理解
「じっくり考えてみてね。考えることは大事だよ。」	子どもに考えさせる時間と場の保証をしてあげる。	保証
教師が意図的に「ありがとう。」を多用し使えるようになった子に対して「いい言葉ね。」と誉め、定着させる。	社会的に見て、望ましい行動を教師が示しモデルとしての存在を示していく。 	モデル

保育実践

1 実践事例「小麦粉粘土で遊ぼう」

(1) 幼児観

幼児は、全体的に明るく素直である。幼児の中には、自分から教師を求め保育者の手を握り共に行動をしようとする子、同じ場においてもそれぞれの気もちであそんでいる子、友達と一緒に過ごす楽しさや心地よさをまだ経験していない子、共通の遊びの中にいて一緒に活動をしていても自分の思いや考えをうまく伝えることが出来ない子、友達の思いに気づいたり受け入れたりできずに自分本位に動こうとする子などの姿が見られる。このような発達において温かな人間関係を育てることは、幼児の姿から大切と考える。様々な体験を通した人との関わりの中で、自分の思っていることを伝えることができるよう、また、相手の思いに気づけるような子を育てたい。

(2) 保育観

園生活の中で、子ども達はいろいろな人と出会い様々な体験をする。友達と楽しいできごとを共有したり、刺激をうけ合いながらイメージを広げたり、欲求や考えをぶつけ合ったりする。そのことを通し自分の世界がひろがり、より生活が豊かになっていくと考える。

幼稚園においては保育の中心に遊びがあることが大切である。一人一人が、遊ぶことを喜び、又、思いを伝え合ったりすることでコミュニケーションが育つ。遊びが深まっていくことは、子ども同士の人間関係が、高まっていく過程であり、共に楽しく遊ぶ体験や葛藤、トラブル等の体験も必要である。例えば、物がたりない、仲間に入れてもらえないなどの体験から思いをぶつけ合う場が出てくるであろう。遊びの中で絡みあっている多様な経験の中で自分の思いを出せるような場を保証してあげたい。自分と違う他の思いに気づき、自分の気持ちもわかってもらおうとする気もちから思いやりが生まれると考える。そのようなよりよい方向へ向かえるように子どもの思いをきちんと見つめ温かな援助を行いたい。

2 環境構成の工夫

小麦粉粘土の3つの楽しみ

1つ目は、感覚的な楽しさを味わうことができる。手のひらで、柔らかな感じを味わったりと素材感そのものを味わう楽しみがある。

2つ目は、素材のもつおもしろさがあり、造形的な遊びを楽しむことができる。子どもの力で自由に動かしたり、いろいろな形に変化させられる。

3つ目は、形を自由にできることから、イメージが広がり、刺激をうけながら、思いを伝え合うことができる。また、ごっこ遊びなど自分がしようとする遊びを作っていくこともできる。自分の思いで、再構成ができるので、表現の幅が広がり創造性が深まる。

大型絵本 お化けのばーばば

クラス全体で読む時、小さな絵本よりも大型絵本の方は、興味をもち集中して聞ける。また、本を読んだ後の導入で教師が作った小麦粉粘土のばーばばを見せ、形が変わることのおもしろさを知らせる。「ばーばばの気もちになって、いろんなものを作ってね。」と言葉かけをすることで意欲をもつと考える。

かみさまの小麦粉粘土(自作の紙芝居)

これまでの保育実践で、友達と一緒に遊びたいという子どもの思いを受け、「いれて」「どうぞ」の遊びの場を設定した紙芝居を作り実践を行った。しかし、子どもの遊びの場面では、仲間に入れないと先生

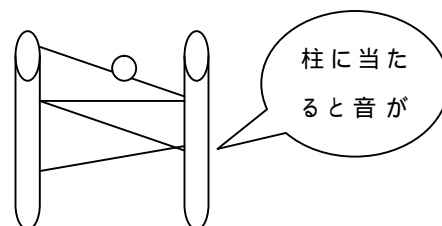
に怒られてしまうと困惑する場が見られた。かみさまの小麦粉粘土の紙芝居では、自分の思いを伝えることが大切だということをメインに紙芝居を作っていた。自分の思いを伝える大切さを知らせたいと考える。

チャイム玉の塔

かみさまの小麦粉粘土の紙芝居では、チャイムの塔が描かれている。ちいさな玉は心の玉で「思いを伝える」ことや友達に優しくすることで、音がなり転がっていくことを描いている。

子ども達が、今日の活動を振り返った時に、思いがだせた場や思いやりの場面を取り上げて、実際にチャイムの塔の玉を流して見せる。

視覚から訴えるだけではなく、音の美しさに耳を傾けることで心にしみ込んでいくと思われる。チャイムの塔を使うことで、より一層幼児と共に感動を共有することができると思う。



心の花瓶

チャイムの塔でころがした玉を心の花瓶にためていく。心の花瓶がいっぱいになったら花の種と交代する。今日の保育が今日で終わるのではなく、明日へと続いていくような環境が大切と考える。

3 検証保育指導案

(1) 保育仮説

友達と小麦粉粘土を使い遊ぶ中で、自分の思っていることを相手に伝えたり、相手の思いを気付いたりすることで思いやりの気もちが育つであろう。

(2) 保育の視点

- 友達と一緒に小麦粉粘土を楽しんでいるか。
- 自分の思いや考えを伝え合う場面はあるか。
- 幼児の思いをくみ取り、温かな援助を行ったか。

(3) ねらい

- 友達と一緒にイメージを出し合いながら、小麦粉粘土で遊ぶ楽しさを味わう。

(4) 内容

- 自分の思いや考えを伝えあいながら友達と遊ぶ。
- 自分なりのイメージで工夫したり試したりして遊びを楽しむ。
- 自分の思いや考え、イメージしたことを伝えて遊びを進めていく。

(5) 展開

時間	予想される幼児の活動	教師の援助	・ 環境構成
9:10	○ 話を聞く ・ 大型絵本「おばけのばーばばを見る。 ・ 遊びの約束を確認する。 ○ 友達と小麦粉粘土で好きなものを作る。 ・ 個々で遊びに取り組む。	幼児が意欲を持って取り組めるように、又イメージを膨らませやすいように、「おばけのばーばば」の読み聞かせをする。 教師が小麦粉粘土で作ったバーババを見せ、形が変わるおもしろさを知らせる。 作品を大切にするためにどうすればいいか、みんなで確認をする。	・ ホールいっぱいにビニールシートをしく。

9:50 10:00 10:25	・先生、「みて」「きて」などの言葉がでる。 ・小麦粉粘土にさわろうとしない子。 ・「こんなのできた」と友達とつながりをもつ。 ・「あんなの作りたい」と友達から刺激をうける。 ・作り方がおもしろいと仲間に入り一緒に遊ぼうとする。 ・小麦粉粘土を自分だけ多く使う。 ・トラブルになったり、思いがぶつかりあったりする。 ○小麦粉粘土を机に飾る。 ○片づけ。(片づけの曲を流す) ○手を洗う。 ○集まる。 ・神様の小麦粉粘土を見る。 ・話し合い。 ・友達の作品の感想を言う。 ・嬉しかったことを話す。 ・楽しかったことを話す。 ・友達のいいところを話す。 ・チャイム玉の塔をみたり、心の花瓶の話を知ったりする。	先生「みて」「きて」の気持ちを全身でうけとめる。 個々の遊びに取り組んでいる姿を認め、一緒に遊びに関わり、思いや気付きを共感する。 小麦粉粘土にさわろうとしない子には、その思いを受け止めながら一緒に楽しむ。 それぞれのアイディアを友達同士で気付きあえるように教師がパイプ役になる。 友達とすることが楽しいという思いを感じとって、喜びを共有したり伝え合う場面を作ったりする。 友達と一緒に小麦粉粘土を分け合って使っている姿を大切にす。 自分の要求ばかり言って友達に粘土をかせない子には、周りの子どもの気持ちを知らせたりする。 さまざまなトラブルやぶつかりあいの中身をとらえ双方の思いを聞きながら一緒に考えていく。 気もちの伝え合いができるように幼児の気もちを十分に受け止めながら、相手に伝えられるよう気付かせていく。 一緒に片づけをしながらきれいになる心地よさを味あわせる。 手をきれいに洗うよう言葉をかける。 気もちを込めてゆっくりと紙芝居読む。 工夫しているところやがんばったところを認めて友達にも伝えていく。 伝え合うことの喜びや、友達に対しての思いやりの心をチャイムの塔や心の花瓶を使って話す。 幼児の思いを受け止めて、話合ったり、共感したりしながら明日への活動が持てるようにする。	・心身ともに心ゆくまで、友達同士で楽しめるように材料を大量に用意する。 (5～6人でできるように粘土の固まりをランダムにおく。) ・小麦粉粘土を片づけるたらいを3個用意 ・小麦粉の作品を提示する。
---------------------------------------	---	---	---

(6) 評価

- 思いを伝え合える指導ができたか。
- 幼児の思いを受け止めた援助ができたか。
- 友達と小麦粉粘土を楽しむ。

結果と考察

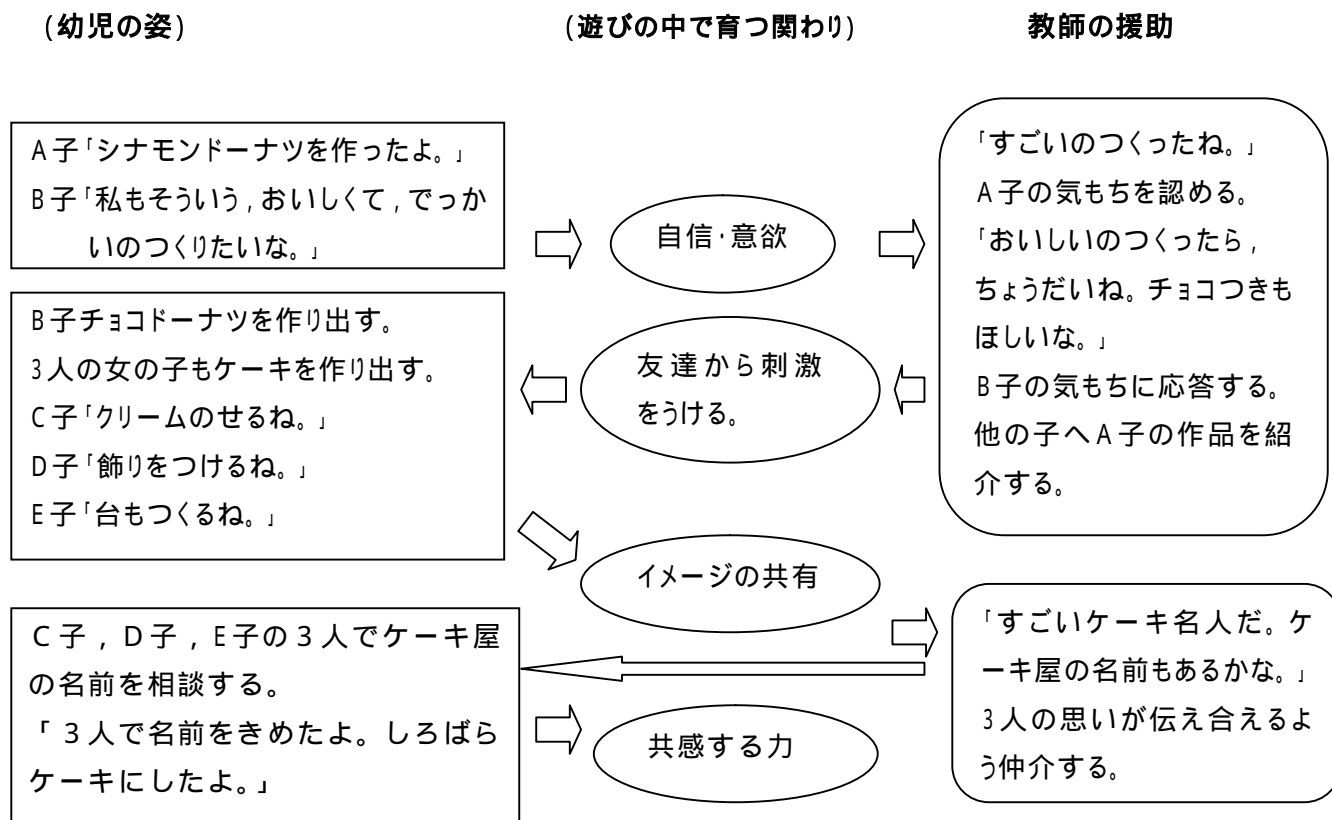
検証

小麦粉粘土の遊びを通して幼児一人一人を理解し援助をすれば、思いを伝え合う温かな集団が育つであろう。

【手立て1】教師が小麦粉粘土の遊びを通してイメージが出し合えるよう媒介する。

【事例】「みんなで作ったケーキ」

大量に用意された小麦粉粘土に興味をもち、友達同士好きなものを作る姿がみられる。教師がイメージを膨らませるような言葉かけをしたことで、協力してケーキを作る姿がみられた。



【考察】

小麦粉粘土の活動は自由な発想で思い思いに表現される事が大切である。ケーキ作りをしている時の「すごいね。」や「おいしいね。」などの言葉かけで幼児も満足し意欲的に取り組む姿が見られる。さらに、一緒に遊びながら「チョコつきもほしいな。」と教師が提案していくことで新たな方向にイメージを広げることができた。

A子のドーナツを紹介することで、他の女の子イメージが膨らみつぎつぎとやりたいアイディアを出し合う姿がみられた。このように同じ遊びの中で、役割分担をしながら、イメージを共有したり、アイディアをだしあうことにことに対して、教師がそのつど認めることで、友達の思いに共感する力が育っていると捉える。



【手立て2】思いがだせるよう教師がパイプ役になりモデルになる。

【事例】小麦粉粘土をかして

小麦粉粘土をランダムに置いてグループで楽しんでいたのですが、粘土も足りない場面もでてきたが、なかなか「わけて」の言葉が言えないでいる。教師と一緒に考えることで、自分の思いが出せるようになる。

(幼児の姿)

(遊びの中で育つ関わり)

教師の援助

A男「先生、粘土がたりないよ。」

A男「そうするよ。」

「お友だちにわけてもらおうか。」と一緒に考える。

A男「わけてちょうだい。」
F子「いいよ、どれぐらい欲しい、どうぞ。」と分けてくれた。
A男「ありがとう。」と笑った。

自己表現
思いやり

友達とのかかわりを見守るが、なかなか言えないので、「分けて」の言葉が大事な言葉だと話し、一緒に「分けて」と言いに行く。

【考察】

「分けて」という言葉が、なかなかでてこなかったが、教師が「粘土を分けて」の言葉が遊びの中で大切な言葉だということをB男に知らせることで、勇気を持って友達に言うことができた。教師の温かい励ましや見守りが、あったからだと思われる。また、教師とB男の会話の中で「かして」という言葉が大切であることを知り、C子も、T子も友達の思いに気づき受け入れている場面がみられた。

自分のしたいことがあり、小麦粉粘土に関わって遊ぶ楽しさを感じることができたので、「かして」の言葉がでてきたのだろうと思われる。さらに、友達に対して、「困っているだろうな」と共感ができている。自分が「かすことができた」ことを友達が喜ぶ、頼りにするということから自分のよさを意識している。

わけてちょうだい。



いいよ、どれぐらい欲しい。

どうぞ。

【手立て3】いろんな教材を使い相手を思いやる気持ちを知るための教材の工夫

【事例】「自作の紙芝居、チャイムの塔、心の花瓶」を通して

(環境の工夫)

(教師の援助)

バーバパパの大型紙芝居



「ばーばぱぱのように粘土もへんしんできるよ。」の幼児のイメージが広がるような言葉かけに「ロボットを作る。」「船がいい。」「ウサギもできる。」「お菓子づくりをする。」などと子ども達からいろいろな発想が、とびだした。

自作の紙芝居



「この紙芝居，誰がつくったの。」「作 栄野川公恵」と話すと，みんなが興味を持って聞いている。画面が両側に広がって，花いっぱいになる場面では，「わあー」と声が上がった。思いやりや思いを伝える心が花になるということ子ども達も感じとったようだ。手作りの紙芝居が人を思いやる内容だったので，紙芝居の後の作品紹介では，「協力してつくった。」など友達との関わりの中で，いいところ見つけをしている。

チャイムの塔



今日の小麦粉粘土を作り，どう思ったか話しあったことを話題にし，玉をながすことにした。「協力して作った心は赤玉よ。」「友達に粘土をわけた優しい心は緑玉ね。」などと言いながら，転がしていった。きれいな音のでる玉に子ども達も引きつけられていた。話をしている時，一人の子が玉を触ろうとやってきた。教師が「我慢の玉は，あるかな。」と言うと，他の子達からも「大切なものは，すぐ触ったらだめだよ。」という言葉がでた。

心の花瓶



「みんなの心の玉が，花瓶のいっぱいになったら，玉が紙芝居で見たような，花の種に変わっているかも。」と話をする。2日後，「元気玉」「がんばり玉」など子ども達が，玉に名前をつけていた。心の玉とビー玉に名前をつけることで，イメージが湧き，お互いのいいところを見つけ，玉に名前をつける姿がみられた。

【考察】

子ども達が静かに話を聞いていたのは，イメージと実体験が重なり合い，感動体験をうけたからだと思う。検証を終わった後のクラスの様子から温かな雰囲気になった。

チャイムの塔の場面の時，すぐに玉をさわろうとする子がいたが，その子にどう育ってほしいかを願い，「だめ」というのではなく「がまんのできる玉はあるかな。」と考えさせるような言葉かけをしていた。その子の育ちに何が必要かをしっかりと伝えていくことで，その子もやってはいけないということを思い自己抑制が働いた。

心の花瓶では，ビー玉が種になるということで，今日の保育で終わらずに，明日へと連鎖させていく環境の働きかけができた。また，玉に名前を付ける姿がみられ他の子を思いやる気もちや友達のいいところを見つけるなど，人とのかかわりが深くなった。

大型紙芝居は，イメージを揺さぶることで「～がしたい。」など，自己主張する意欲が見られた。

自作の紙芝居では，子ども達の心に優しさが植え付けられたと思う。なぜなら，紙芝居を読んだ後に自分の小麦粉粘土の作品を紹介したが，「○○ちゃんが協力してくれた。」「○○ちゃんと楽しくできた。」など友達と関わり，思い合ったことや優しくされたことを交えて発表ができていた。

【手立て4】集中して話を聞くための温かな言葉かけ

【事例】心に訴える言葉かけ

みんなで、集まる時に場を離れたり、ふざけることがよくあるが、話をよく聞くためには、温かな言葉かけが大切である。子どもの姿を見ながら適切な言葉をかけることで、子どもが、話を聞こうとするようになった。

・ねそべっている子への援助

「あら、腰が痛いのかな。大丈夫？心配だけど・・・。」起きあがってきた場面では、「よかった。大丈夫のね。」

・集中がとぎれざわついた時の援助

「○ちゃんの目はやさしいね。お話してもいいよって、聞いてくれてる目だね。そういう目はすてな。」

【考察】

ねそべっている子に教師が「心配だけど。」「大丈夫。」と言葉をかけることで、今まで横になっていた子が、座って聞かなくてはと気付く姿勢がみられた。また、ざわついた時によく聞いている子に「すてき」という言葉を使うことで、他の聞いてない子の模範になった。ざわついている子は、聞かなくてはいけない場面だと、はっとしたおもむきの表情になり、よく聞いている子を真似て、静かにする場面がみられた。ふざけている子を注意するのではなく、聞いている子にスポットをあてることが大切だと捉える。話をきかない子どもに「聞きなさい。」「静かに。」などの否定的な言葉ではなく、心をゆさぶるような肯定的な気付けさせる温かな言葉かけをかけることが大切と考える。

教師の温かなことばかけや教材の工夫を行うことで温かな人間関係を育むことができた。

研究の成果と今後の課題

1 成果

- 子どもの喜び、発見、訴えなどを受けとめ、心情面を理解しながら、常に教師が温かなことばかけをすることで、子ども一人一人に心の安定がみられ、充実した活動ができた。
- 自作の紙芝居やチャイムの塔では、連動した構成を工夫することにより、心情面に訴えることにつながった。
- 計画的なカリキュラムと綿密な指導計画により、課題や目標を達成することができた。

2 課題

- 一人一人の幼児の発達を踏まえた適切な援助の工夫改善
- 相手の話を最後まで聞こうとする態度を育む為の計画的な取り組み

《主な参考文献及び引用文献》

「幼稚園教育要領」	文 部 科 学 省	フレーベル館	2003
『保育内容「人間関係」』	森上史郎 他編集	ミネルヴァ書房	2005
「幼児教育指導法—保育における援助の方法—」	阿部明子 他編集	萌文書林	2001
「新たな幼稚園教育の展開」	小田豊 他編集	東洋館	2005
「こどもとともにある保育の原点」	高杉 自 子	ミネルヴァ書房	2006
「保育の関わり—人間関係—」	森上史郎 他編集	フレーベル館	1992
「調査研究協力会報告書」	無藤 隆	文部科学省	2002
「幼児一人ひとりのよさと可能性を求めて」	文部省幼稚園課内幼稚園教育研究会	東洋館出版	1992
『「出会い、触れ合い、育ち合う」教育課程』	茨城大学教育学部附属幼稚園	明治図書	2003
研究紀要	熊本大学教育学部附属幼稚園		1995
研究紀要	大津市教育研究所		1995
研究紀要	大津市教育研究所		1997